

ニッケルめっきの廃液再生

塚田理研工業 設備開発・稼働

金属価格高騰に対応 事業化も検討

プラスチックめっきなどの塚田理研工業（駒ヶ根市）は、本社工場のニッケルめっき処理工程で生じる廃液をめっき液に再生する設備を開発し、稼働させた。ニッケルの価格が高騰していることなどから、廃液として処理していたものをリサイクル。資源の有効利用にもつなげるため、事業化して同業者に設備を販売することも検討する方針だ。



塚田理研工業が開発した、ニッケルのめっき液を再生する装置

めっきにはニッケルや銅などの金属を使うが、塚田理研工業ではニッケルの使用量が最も多い。2021年には硫酸ニッケルの重量で約5・8トンを使用した。同社はこれまで、使用済みのめっき液など金属が含まれた廃液は、樹脂に金属を吸着させた後、薬品で樹脂と分離。金属ごとに業者に売却してきた。全ての金属を回収できない上、不純物が含まれるため販売価格は安い。

開発した設備は、使用済みのニッケルのめっき液をタンクにため、高い圧力をかけて「逆浸透膜」に通す仕組み。膜は水の分子を通すが、ニッケルイオンを通さないため、この過程を繰り返すことで濃縮されて、めっき液を再生できる。設備の開発費用は約3500万円。昨年11月から再生液の一部のめっき工程ラインで試験的に使用している。

同社によると、ニッケルの価格は19年に1キログラムあたり1300円前後だったが、現在は4千円まで上昇している。再

生することで、年間で約3500万円の経費削減につながる見通し。下島聡社長は「ニッケル価格の高騰は長期化する可能性もある。資源の無駄を省くことは経営面でも重要だ」としている。

同社の従業員数は2355人。21年5月期の売上高は77億円で、22年5月期には80億円を見込んでいる。主力は自動車関連部品などに使われるプラスチックめっき。半導体需要の高まりで、プリント基

同じ場所が常に日陰

タカノ（上伊那郡宮田村）は、太陽の動きを追尾する機能を搭載した大型パラソルを開発している。太陽の位置に合わせてパラソルが自動で傾きを変え、同じ場所が常に日陰になるようにする。あらかじめ設定した時間やセンサーなどに基づき電動で傾斜を変える方法を検討。来年4月の発売を目指す。

板めっきの受注も拡大している。額工ノリく、計契約台数はは上る。

新車 5年定額プラン

軽自動車リースのガイアスジャパン

ローン契約商品



リース向けの新車の軽自動車を見て回る岡野社長＝上田市塩川の本社

軽自動車リース、中古車販売のガイアスジャパン（上田市）は、従来の個人向け7年契約の新車リース商品に加え、5年間定額で新車に乗れるプランを新設した。電気自動車（EV）も対象とする。

同社は、2012年に中古車リースの契約を目標として、

新設したプランで、車両の車検代がかかり、ラット7と同じ。フラットは、中古車リースは、中古車リースで再リースする。同社によると、新車の納期がめ、中古車市場は、仕入れ値を、再利用する。再利用率を上げ圧力を受け、日本自動車リース（東京）に引き継ぐ。松本駅の、

また、新工場の近くにあるの工場にも6千万円を投じて、